

東北地理学会 2013 年度春季学術大会(2013-05-18)

2-04

沖縄市におけるポピュラー音楽文化関係観光資源の現状と、その活用の可能性

山田晴通（東京経済大）

**Harumichi YAMADA: Tourism resources relating to the local popular music culture in Okinawa city, Okinawa prefecture, Japan.**

観光資源としてのポピュラー音楽に関する実証的研究の一環として、沖縄県沖縄市におけるポピュラー音楽を中心とした地域的音楽文化の蓄積と、その観光資源化の取組を事例として検討するため、短期間の予備的調査を行った。

沖縄県は、琉球以来の独自の伝統文化や、米国統治の経験の影響もあって、ポピュラー音楽の分野においても日本国内では他に例がない特殊性をもっている。孤立した独自性の高い音楽市場の成立と、多様な音楽伝統、その複雑な融合は、しばしば日本全国にも広く支持される音楽を生み出してきたが、その根本には沖縄県の特殊な歴史的背景がある。

その中でも、沖縄市は旧コザ市以来、沖縄の音楽文化の中で特異な地位を占めてきた。全島エイサー大会の開催、嘉手納基地と密接に関係してきたオキナワン・ロックの伝統、そして照屋林助から **ORANGE RANGE** に至る地元に着した音楽芸能人の活動など、様々な要素が、沖縄県のポピュラー音楽という文脈の中でコザ～沖縄市に特別な位置づけを与えてきた。

沖縄市においては、こうした豊かな音楽文化の蓄積を、まちづくりや観光資源開発に活かそうという試みが、散発的ながら既に取り組みされている。民間の旅行業者の企画による地元音楽家との交流を交えたツアーや、市街地再開発にともなって開設された市直営（指定管理者制度）のライブ会場「音市場」を収容する複合施設「コザミュージックタウン」から、（必ずしも音楽文化に焦点を当てたものではないが）市史編纂事業と連動して商店街の空き店舗を展示施設として活用する試みである「沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート」まで、様々な萌芽的取り組みが行なわれている。

しかし、こうした事例をどう評価すべきかは、議論の分かれるところである。また、本来であればこうした動きに同調することが期待される文化施設の中には、沖縄市文化センターに収められた諸施設（郷土博物館、芸能館など）のように旧態依然、あるいは形骸化した状況を脱していないものもある。

現地での観察からは、沖縄市における音楽文化の観光資源化の取り組みが、現時点で直面している様々な課題が見て取れる。そのひとつは、施設間の連繋である。以上で言及した諸施設は、ある程度分散して配置されているが、観光客にこれらの施設を回遊させるための工夫はほとんどなされていない。コザミュージックタウンのウェブサイトで提示されている絵地図では、様々なランドマークが稠密に存在するような演出がなされているが、現実の諸施設の配置は絵地図のイメージほど稠密ではない。また、全島エイサーまつりのような大規模イベントがある時期に、イベントでやって来た観光客を他の施設等へどう引き寄せるか、という課題がある一方で、イベントがない時期にやって来る観光客に何をどう見せ、体験させるのかについての明確な方向性は示されていない。さらに、個人旅行者への対応に様々な課題があることや、沖縄県の観光産業にとって重要な顧客である修学旅行団体の取り込みが遅れているといった課題もある。

こうした諸課題に対して、音楽文化を梃子に、どのような課題克服が可能かを考え、政策的提言を構築していく上では、米国における取り組みの諸事例が参考となるものと思われる。また、他方では、まちづくり行政と観光行政、さらには教育行政との連繋など、行政機構内の協力関係が肝要になるものと考えられる。